

Japanese Society of Root and Tuber Crops

日本いも類研究会

September 1998 No. 16

(本部 事務局) (財) 日本特産農作物種苗協会内 107-0052 港区赤坂 2-4-1
 (つくば事務所) 農業情報利用研究会内 JRTつくば事務所
 〒305-0033 茨城県つくば市東新井 26-4-603
TEL 0298-56-0236 FAX 0298-56-0024
<http://www.jsai.or.jp/~jrt/>
jrt@jsai.or.jp

お知らせ

平成10年度会費納入がお済みでない方は「銀行振込」または「郵便振替」で払い込みをお願いします。(普通会員: ¥2000、賛助会員: 1口 ¥20000) **9月30日まで**にお願いします。

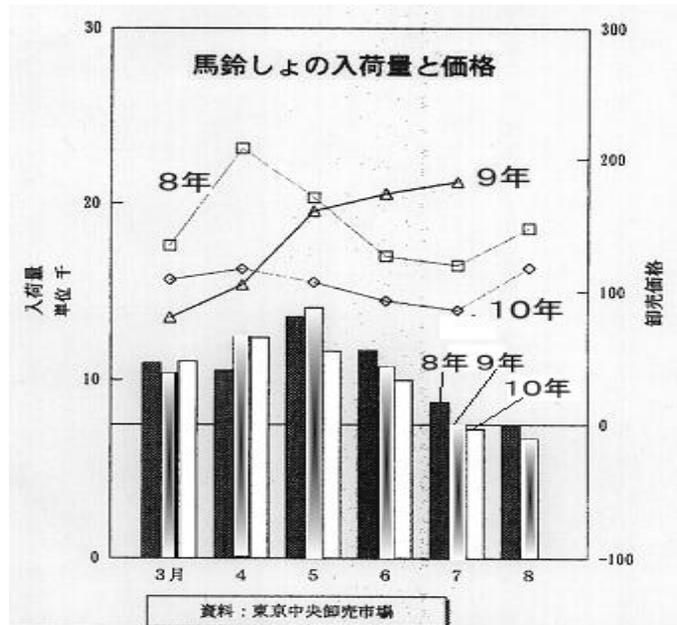
銀行振込 常陽銀行 研究学園都市支店 普通口座 = 1449951 名義 = JRTつくば事務所
郵便振替 郵便口座 = 00180-7-362899 口座名義 = JRTつくば事務所

会費の領収証は、「郵便振替受領証」、「銀行振込金受取書」をもって代えさせていただきます。

最近のばれいしょ市況について

昨年来、低迷していた馬鈴しょの価格が、5月以降急騰し、7月中は強含みで推移していました。これは、九州産が全体的に減少したことに加え、関東地方についても収量が減少し、入荷量が前年に比べ1~2割程度減少したことによります。なお、品質的には特に悪くないとのことでした。

その後、8月に入り、主産地が東北、北海道に移りつつありますが、いずれの産地も生育は良く、入荷も順調に推移しており、高温による需要減も相まって価格は前年をやや下回って推移しており、100円/kg程度となっております。平成9年産が安値であったことから、本年産は堅調に推移して欲しいものです。



東京中央卸売り市場の入荷量

	3月	4月	5月	6月	7月	8月
平成8年	10,938	10,528	13,565	11,669	8,768	7,464
9	10,347	12,418	14,093	10,716	7,399	6,730
10	11,026	12,399	11,606	9,979	7,237	

	3月	4月	5月	6月	7月	8月
平成8年	135	208	171	127	120	148
9	109	117	107	93	86	118
10	80	105	161	174	183	

さつまいも栽培の安全指数(2)

きれいな畑 元三重大学教授 塩谷 格

このようなリスクの大きい生産地から、なぜ今日みるような見事なおいしいサツマイモが出回っているのでしょうか。産地では、連作を避ける、ネコブセンチュウを減らす作物を1年挿入する、水田を畑状態にして栽培する。あるいは、病土を取り除き新しい土を運び込む、など工夫を取ると聞く。しかし、やはり広く行われているのは薬剤防除、薬品注入の作業は命がけだが、比較的安価で速効性がある。土中の小動物や微生物社会を全滅させる揮発性の高い薬剤でくん蒸剤とか殺センチュウ剤ともいわれる。

日本の1980年代のこれら薬剤の消費量(出荷量を金額に換算)は、一カ国としては世界最高であり、それは西欧諸国の全量に匹敵していた。同年代の後半から次々と出た欧米諸国の厳しい殺センチュウ剤使用規制や禁止を考慮すれば、今日とても日本が例外的に大きな消費国であることは変わりはないであろう。我が国で主に使用される薬剤は消費の多い順に、D-D剤(ジクロロプロペン)、臭化メチル、クロロピクリンである。いずれも毒性の強い物質で、例えば、クロロピクリンは第一次大戦時のドイツの化学兵器であった。これら薬剤はその性質上サツマイモ以外の多くの野菜の露地・ハウス栽培などに使用されるが、作物別薬物使用の統計はなく、その実態は霧の中である。ここではあえてサツマイモ主産地の出荷と薬剤消費の関係を推測する。

まず、都市市場向けの青果サツマイモの特産地に限ってみた。そこでは、品質の高いブランド品のため、より高度な栽培技術がとられているであろう。東京、名古屋、大阪青果市場に青果用サツマイモの出荷が大きいのは、茨城、千葉、徳島、香川、高知、熊本、大分、宮崎、鹿児島県の9県である。平成3年市場統計から各県の出荷量を、また、同年農業統計から上記3種類のセンチュウ剤の総消費量(厳密には出荷金額)をとり、対比させた(図2)。ちなみに、これら県の殺センチュウ剤の合計は、国内消費の約50%を占めるほど大きい。

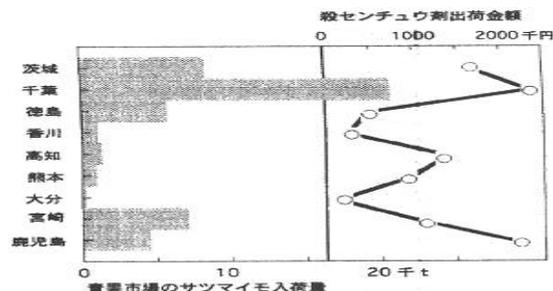


図2 青果用サツマイモの出荷と殺センチュウ剤使用
事務局よりお知らせ

収穫の秋を迎え、いも類関係イベントの話題をニュースレター・ホームページへの掲載ご希望の方は、JRT編集委員会 FAX01527-5-2012 までお知らせください。農林水産省のホームページに「子供のための農業教室」が新設、いも類の生産過程などを紹介。 <http://www.maff.go.jp/kyoshitsu/>

茨城、千葉など9県は三大都市市場へ青果用サツマイモの出荷が大きい。それらの出荷量と各県への殺センチュウ剤(クロロピクリン、D-D剤、臭化メチル)の出荷金額を示す。これら9県の殺センチュウ剤出荷金額の合計は国内出荷総金額の約50%を占める。とりわけ、千葉、鹿児島、茨城、宮崎の金額が大きく、この薬剤がサツマイモなど畑作によく使用されていることを示唆している。

図2から次のようなことが推測される。(1)茨城、千葉での大きな薬剤使用は、青果用サツマイモの大きな生産と関連があろう。(2)鹿児島、宮崎では図2は表されていない加工用さつまいもの生産があり、青果用の栽培とともに薬剤が多用されている可能性がある。(3)高知の出荷量は小さく、サツマイモ以外の野菜類のハウス栽培に集中使用されている可能性が高い。(4)ブランド品種なると金時(高系14号系)を出荷する徳島の産地は、ほどほどの出荷量に係わらず薬剤使用量が小さいことが注目される。以上、全体として青果用サツマイモの生産活動は薬剤に大きく依存していると推察される。

こうした薬剤は、「死の土」を作り耕地本来の生産力を損なわないか。農地及び周辺居住地の水や大気を汚染しないか。大気に放散する物質はオゾン層に届かないか。これらの疑問については多くの課題があるが、今日ではいずれも危険性あり、という見方に集約されようとしている。アメリカでは1986年以来D-D剤中の不純成分の発ガン性が指摘され、この薬剤を多用する果樹王国カリフォルニアでは禁止措置がとられた。近年、臭化メチルはオゾン層破壊の原因となる物質として注目を浴びようになったが、既に欧米では早くからこの薬剤の農業上の使用を禁止、あるいは生産、輸入禁止、使用量の制限などの動きがある。殺センチュウ剤の最大消費国日本では、当然大きな問題となるであろうし、問題とせねばならない。

ここでは、センチュウについてのみ取り上げたが、主要な病気はまだいくつもあり、それぞれについての安全指数を考慮しなければならないだろう。しかし、万病に効く品種はない。まずはセンチュウ安全指数ゼロからの脱却を図る。それには抵抗性品種の育成と普及しかないことは明白である。

なぜかサツマイモ品種は時代を象徴している。消費で満足する品種、腹を満たすための品種、輸入政策に反抗した品種、病弱ながら甘美な品種、色の魔術師のような品種などがある。この時代、この社会にはどのような品種がふさわしいか。それは「これを植えたら畑がきれいになった。」と言われるような品種であろう。それは、「耕土深くから過剰無機養分を除去し、病気に決定的な抵抗力があり、その跡作には多くの青果物が健やかに育つ。」といった、産地の健全化効果を果たす品種である。(おわり)